

平成30年6月29日現在

機関番号：30108

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07145

研究課題名(和文) ルーマニアにおける宗教学の展開に関する体系的研究

研究課題名(英文) A systematic study on the development of religious studies in Romania

研究代表者

奥山 史亮 (Okayama, Fumiaki)

北海道科学大学・高等教育支援センター・講師

研究者番号：10632218

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はルーマニアにおける宗教学の構築過程について、以下の事柄を明らかにした。ルーマニアにおける宗教学の構築は、1920年代にミルチャ・エリアーデがイタリアの宗教研究を受容し、導入したことが契機となっている。エリアーデは、R・ペッタッツォーニの宗教史学を受容しようとしたが、「祖型」「聖なるもの」をめぐる見解を違えるようになった。エリアーデは、宗教体験を手掛かりに宗教の普遍的な形式を解明しようとするV・マッキオロの神秘主義研究も積極的に受容しようとした。マッキオロとの学的連関は、エリアーデが宗教現象学を受容する基盤となった可能性が想定される。

研究成果の概要(英文)：This research clarified the following matters on the process of construction of religious studies in Romania. Romanian religious studies were built by Mircea Eliade accepting Italian religious studies in the 1920s. Eliade tried to accept R. Pettazzoni's history of religions, but they have different view on archetypes and the sacred. Eliade had also actively accepted the methodology of V. Macchioro's mysticism study that tried to elucidate the universal form of religion based on religious experiences. It is considered that the academic linkage with Macchioro may have been the basis for Eliade to approach phenomenology of religion.

研究分野：宗教学

キーワード：宗教史学 宗教現象学 ルーマニア

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、ルーマニアの宗教学が、イタリアおよびオランダから輸入され、神学とは異なる独自の理論を備えた学問として位置づけられるようになった過程を解明するものである。ルーマニアにおける宗教学の導入は、1920年代にミルチャ・エリアーデがイタリアとオランダの宗教学に関する研究に着手したことが契機となっている。エリアーデと両国の研究者たちは、宗教学が「普遍的宗教」を世俗の見地から研究する点で、神学から独立した学問であることを証明するため、宗教学独自の諸概念について意見を交わし、共有することに努めた。これらの議論は、宗教学の成立史にかかわる重要な内容を含むが、その後エリアーデに関する研究が急速に減少したことにより、未整理のままとなっている。そこで本研究は、ルーマニア宗教学の成立史を描きなおすことで、宗教学というディシプリン自体の形成過程と時代的特性を明らかにすることを試みた。

具体的には、エリアーデは、イタリアのラッファエーレ・ペッタッツォーニを中心とする宗教史学派とオランダのファン・デル・レーウを中心とする宗教現象学派の成果を受容しながら、宗教学を体系化していった。一方で、ペッタッツォーニも、複数の宗教を研究対象とする故に神学から批判されていた宗教学を制度化するため、積極的にエリアーデと交流し、国境を超えた宗教学の体系化に尽力した。このようなエリアーデらの交流により、「聖なるもの」や「祖型」「最高存在」といった現代宗教学の礎となる概念が明確化されていった。

しかしエリアーデを中心とするルーマニア宗教学は、ポストモダン思想が盛んになった1990年代になると、その本質主義的前提と民族主義的志向が激しく批判されるようになり、国内外ともに研究されることがきわめて少なくなった(*Hermeneutics, Politics, and the History of religions*, ed. by Christian Wedemeyer and Wendy Doniger, Oxford University, 2010 など)。そのため、エリアーデやペッタッツォーニらの共同研究の内容は看過され、未整理のままとなっている。しかし、現在は、ポスト・コロナル批評などを受け、ヨーロッパ近代に由来する学問体系のみなおしが焦眉の課題となっている。従って、ルーマニアと各国の研究者たちが宗教学の根本となる諸概念について意見を交わし、宗教学のディシプリンを形成していった過程を解明することが必須となる。

## 2. 研究の目的

本研究では、下記の(1) - (3)の解明を目的とした。

(1) エリアーデとペッタッツォーニの往復書簡に関する研究：エリアーデとペッタッツ

ォーニ間の議論の内容を解明するために、ふたりの往復書簡(Mircea Eliade, Raffaele Pettazzoni, *Correspondance 1926-1959*, Les Edition Du Cerf, 1994)を整理し、その特徴を抽出する。両者は、宗教学の方法論、他の宗教研究者の著作について、書簡上で様々な見解を交換しながら、彼ら独自の諸概念を構築しようと模索していた。それらの議論過程を、歴史的コンテクストを踏まえながら分析する。

(2) 宗教学雑誌『ザルモクシス』の編集過程に関する研究：ルーマニアにおけるイタリア宗教史学派の受容過程を解明するために、ルーマニアで初めて宗教学雑誌として刊行された『ザルモクシス』の掲載論文を整理し、その編集上の特徴を明らかにする。本誌はエリアーデとペッタッツォーニが共同で編集し、第二次大戦以前のブカレスト大学で刊行していた学術雑誌である。本誌には、両国の宗教学者が寄稿し、「聖なるもの」や「祖型」「最高存在」といった基礎概念について議論する場を形成していった。しかし本誌に関する研究は、世界的にも未着手の状況である。本誌の分析により、宗教学の基礎概念が両国間で議論され、共有されるようになった過程を解明する。

(3) エリアーデとオランダ宗教現象学派の交流に関する研究：エリアーデにおける宗教現象学の受容過程を明らかにするために、エリアーデとオランダ宗教現象学派の関係性を整理する。エリアーデはイタリア宗教史学派と交流する一方で、宗教現象学の方法論を取り入れ、宗教史学と宗教現象学を統合する方法を模索するようになった。エリアーデはファン・デル・レーウを始めとするオランダ宗教現象学派からその方法論を受容した可能性が想定され、その交流過程を分析する。

## 3. 研究の方法

本研究は2年の実施計画であり、「2. 研究目的」に基づく具体的な計画は下記の6段階をたどった。

- (1) 『エリアーデ＝ペッタッツォーニ往復書簡』の内容を整理し、ルーマニア・イタリア両国間の宗教学上の交流を解明する。
- (2) 『ザルモクシス』に収録されている各論文の内容を整理する。
- (3) 『ザルモクシス』刊行時のブカレスト大学における宗教学をめぐる状況を解明する。
- (4) オランダ宗教現象学派とエリアーデの共同研究を整理し、両者の関連性を明確化する。

## 4. 研究成果

研究方法の(1)~(4)を実施することにより、以下の6点が明らかになった。

エリアーデはブカレスト大学入学以降の1920年代において、ペッタッツォーニの著作を翻訳したり、書評論文を執筆したりす

ることにより、宗教史学をルーマニアに導入しようと試みていた。

それらの翻訳や書評論文を既存の雑誌に掲載していたが、より自由に編集可能な発表媒体を求めて、ペッタッツォーニ等からの協力を得ながら『ザルモクシス』を創刊した。

エリアーデとペッタッツォーニは、宗教の普遍的特性をあらわす「祖型」「聖なるもの」といった諸概念の位置づけをめくり、見解を違えるようになった。

エリアーデは、宗教体験を手掛かりに宗教の普遍的な形式を解明しようとするヴィットリオ・マッキオロの神秘主義研究も積極的に受容しようとした。マッキオロとの学的連関は、エリアーデが宗教現象学を受容する基盤となった可能性が想定される。

エリアーデの指導教官であったナエ・イオネスクは、シュライアーマッハ、ディルタイ、ルドルフ・オットーらの思想、宗教理論に基づく宗教哲学を展開していた。イオネスクがブカレスト大学にて開講していた講義「宗教哲学」「形而上学」を通して、エリアーデはオットー、ディルタイらの思想を受容した可能性が想定される。

エリアーデは①～⑤における研究者らから方法論を受容することにより、ルーマニアの民間伝承と神話の研究を実施し、ルーマニア宗教学の基礎を構築していった。

について、エリアーデとペッタッツォーニは、1926年からペッタッツォーニの没年である1959年まで118通の書簡を交わし、深い交遊をもった。現存している最初の書簡は、正確な日付が記されていないが、1926年1月から2月にかけてエリアーデがペッタッツォーニ宛てに送ったものである。この書簡には、ペッタッツォーニの代表的著作である『秘儀 宗教史学論集』の書評を執筆したので受け取ってほしいということ、『秘儀』に加えて『ツアラトウストラの宗教 イラン宗教史』『古代ギリシアの宗教』を読解したこと、『神 一神教の形成と展開』と『サルデーニャの原始宗教』はルーマニアでは入手が困難であるので、送ってもらえないかという依頼が記されていた。

1926年2月半ばから同年5月のあいだに書かれたエリアーデのペッタッツォーニ宛書簡は、郵送してもらった『サルデーニャの原始宗教』についての感謝を伝えているほか、1924年に刊行されたペッタッツォーニの著作『宗教史学の展開と性格』の書評と翻訳を作成執筆中であることを報告している。さらに、エリアーデはこの時期に『神 一神教の形成と展開』を翻訳し、その脚注において、ペッタッツォーニはヨーロッパで最高の宗教史学者であり、彼の著作はルーマニアでも広く受け入れられるにちがいないと記している。これらの資料からは、当時のエリアーデがペッタッツォーニの宗教史学を受容し、ルーマニア国内に紹介するために尽力して

いたことが読み取れる。

1938年2月15日付けのペッタッツォーニ宛書簡は、宗教学雑誌『ザルモクシス』を創刊する計画について報告している。『ザルモクシス』は、ルーマニア初の宗教学雑誌であり、エリアーデが1938年にブカレスト大学において創刊し、ペッタッツォーニやアーナング・クマラスワミー、エルネスト・ブオナイウティらの協力を得ながら編集を務めた。本書簡においてエリアーデは、ペッタッツォーニの論文を本誌第一巻に掲載する許可を求めている。その後もエリアーデは、『ザルモクシス』の編集方針をペッタッツォーニに幾度も相談しながら、ペッタッツォーニの著作に関する書評を執筆したり、翻訳したりする作業を進めていた。

戦後にエリアーデがフランスに亡命してからも両者の交遊は継続したが、次第に学的見解の相違が顕著になっていった。両者の関係性に決定的な変化がみられるようになったのは、1949年の『宗教学概論』刊行以後のことである。周知のように『宗教学概論』は未完の遺作となった『世界宗教史』と並ぶエリアーデの代表的著作であり、後者が歴史的地平において宗教現象の特質を把握することに力点を置いたのに対し、前者は時代地域横断的な分析を目的にした。そのことは当書結論における以下の文言に顕著に示されている。「本書において、われわれは宗教現象というものを、歴史的展望において研究することを避け、宗教現象それ自体を、つまりヒエロファニーとして扱うようにしてきた。それだからこそ、たとえば水のヒエロファニーの構造を解明するのに、われわれはあえてキリスト教の洗礼と並べて、オセアニアやアメリカや古代ギリシア=オリエントの神話、儀礼を提示し、それらを相互に隔てているもの、つまり歴史を一切捨象してきたのである」(『宗教学概論』第3巻、久米博訳、せりか書房、1994(1974)年、194頁。 *Traité d'histoire des religions*, Payot, Paris, 1949, p. 455-456)。ここでは、時代地域の差異を超えて存在する宗教の形式が想定されており、歴史はそれを分断し、差別化するものとして理解されている。当書は「祖型 archetypes」「聖なるもの sacré」といった概念を用いながらこのような時代地域横断的な分析を展開しているのである。

宗教史学者であるペッタッツォーニは、当然のことながら、歴史の外に措定される「祖型」を認めず、当書に対する批判を提示した。1949年2月4日付のエリアーデ宛書簡は、『宗教学概論』の献本に対する礼状であり、その刊行を称えているが、当書は宗教現象を学的に対象化できておらず、宗教史学的研究とは見なせないことを伝えている。その後もペッタッツォーニは、「祖型」「聖なるもの」といった普遍的な概念によって宗教現象を論じるのではなく、宗教を歴史的生成物として分析することの必要性をエリアーデに説いて

いる。

それに対してエリアーデは 1949 年 3 月 8 日付のペッタッツォーニ宛書簡において、師からの指摘に理解を示しながらもつぎのように応答した。「わたしは実際のところ先生の御意見に完全に同意いたします。祖型であっても歴史を有しており、結局のところそれらも歴史であるのです〔中略〕。宗教現象そのもの（これは決して歴史の外を意味しているのではありません！）を論じた〔『宗教学概論』〕第 1 巻においてわたしが強調したかったのは、以下のことだけです。すなわち儀礼とは、オーストラリアやマダガスカルなどの儀礼になる以前には……儀礼なのです！そして、それはそのようなものとして考察する必要があります。儀礼の「イデア」、どこにも存在しないような本質を抽出したいのではなく、宗教的である」とわれわれが合意している。その独特の内容に最初に注目したいのです。宗教現象が歴史的生成物であることに同意すると言いながらも、エリアーデは歴史によって差異化される以前の「宗教現象そのもの」の解明を目指しており、ふたりの議論は噛み合っていないと考えられる。

エリアーデはペッタッツォーニを自らの師として敬愛し、方法論上のモデルとしてその著作を生涯にわたって参照し続けた。しかし、宗教現象を歴史的生成物とみなすペッタッツォーニに対して、エリアーデは師が研究の対象にしなかったこと、すなわち宗教現象の超歴史的性質、歴史を越えようとする宗教的人間の特性を研究の対象にするようになり、「祖型」「聖なるもの」といった概念を多用するに至った。上記『宗教学概論』からの引用文に示されていた、「歴史を一切捨象」し、「宗教現象それ自体」を対象にする方法論を「宗教現象学」と呼ぶことが可能ならば、『宗教学概論』はエリアーデが宗教現象学者として自らの方向性を定め、ペッタッツォーニから自立することを宣言した著作といえよう。

これらの成果は、日本宗教学会第 75 回学術大会におけるパネル企画「現代宗教学におけるエリアーデ宗教学の展望」での研究報告「エリアーデにおける宗教史学と宗教現象学を受容と批判」、および Mircea Eliade, 《La Mythologie primitive》, *Critique*, No. 27, 1948, p. 708-717 の「翻訳」と「解題」『ニクス』第 5 号（堀之内出版）において発表した。

を調査する過程において、エリアーデはファン・デル・レーウの『宗教現象学』を読解する以前に、イタリアのキリスト教学者であるヴィットリオ・マッキオロから大きな影響を受け、宗教現象学に接近した可能性が明らかになった。そのため、計画を変更し、エリアーデとマッキオロの学的連関の解明から着手することにした。

マッキオロは神秘主義とオルフェウス教の研究者として活躍し、ナポリの古代博物館館長を務めた人物である。1880 年にトリエステで生まれ、ボローニャ大学で芸術学や考古学を中心に学んだ。大学卒業後は、考古学の研究を継続するなかでオルフェウス教と神秘主義の研究に従事するようになり、その成果をまとめた代表的著作『ザグレウス：オルフェウス教研究（*Zagreus: Studi Sull' orfismo*, 1920）』を刊行した。そのほか『体験としての宗教に関する一般理論（*Teoria generale della religione come esperienza*, 1922）』など多数の刊行著作がある。エリアーデは 1925 年にプカレスト大学に入学する前後からマッキオロの著作を読み始め、1926 年 1 月に直接マッキオロ宛に書簡を出して以降、往復書簡による深い交友をもつようになった。

1926 年 5 月付のマッキオロ宛書簡は、宗教と神秘主義の起源に関心をもっており、マッキオロの研究はこの主題におけるきわめて重要な先行研究であること、そしてペッタッツォーニやフレイザーとともにマッキオロをルーマニアに広く紹介するために主著『ザグレウス』の翻訳に取り組んでいるほか、書評論文を執筆する予定であることを伝えている。この書簡に記されている通り、エリアーデは 1920 年代後半の時期にマッキオロに関する書評論文を数多く発表した。主要な論文だけに限っても以下のものがある。

1. “Misterele orifice la Pompei” *Orizontul*, 27 mai 1926.
2. “Misterele și inițierea orientală” *Adevărul literar și artistic*, 18 iulie 1926.
3. “Zagreus și păcatul originar” *Adevărul literar și artistic*, 5 august 1926.
4. “Dionysos-Zagreus” *Adevărul literar și artistic*, 1 august 1926.
5. “Misticismul orfic al lui Heraclit” *Adevărul literar și artistic*, 23 inauarie 1927.
6. “Dionysos-Christ” *Orizontul*, 3 februarie 1927.
7. “Orfeu și inițierea orfică-Misterele nu erau reprezentării scenografice - ” *Adevărul literar și artistic*, 26 septembrie 1928.
8. “Revue Critique. Les religions des mystères dans les publications récentes” *Logos*, 1928.

いずれもマッキオロをルーマニアに紹介するための書評論文であり、具体的な分析を詳細に記した専門論文ではないが、以上を概観する限り、マッキオロに対するエリアーデの関心のあり方は次の 2 点にまとめられる。

(A) イニシエーション参加者は、神との合一をスペクタクルではなく、現実的な体験として認識する。研究者は、神秘体験を歴史的

要因、社会的要因として分析するのではなく、現実的な事柄として捉えたうえで、その意味の把握に努めるべきである。

(B) 宗教史学 Histoire des Religions は、上記の課題に取り組む学問領域である。

この2点は、1920年代の時点では未だ体系的かたちをとってはいないが、のちにエリアーデ宗教学の根本的主張として展開される萌芽であると考えられる。

(A) に関して、参入者にとって神との合一体験が現実的出来事であり、イニシエーションにおいて参入者は神を演じるのではなく、神そのものになっているという主張は、戦後にエリアーデが展開した儀礼論とかなりの程度重なるものである。すなわち、儀礼は神話をスペクタクルとして演じているのではなく、現実として再現しており、参入者は聖なる時空間を生きる神そのものになっているという、エリアーデ宗教学の主張である。

(B) に関して、神との合一体験はイニシエーション参入者にとって現実として認識されるものであり、その体験の意味構造を歴史や社会的要因との連関におくことなく把握する必要があるというのは、宗教者のヒエロファニー体験を歴史や社会に還元せずに把握するというエリアーデ宗教学の根本的主張へと展開される。

マッキオロとの学的連関を踏まえると、このようなエリアーデの非還元的主張は、レーウというよりはマッキオロの研究とのつながりが強く見て取れるものであり、それを後年まで保持した可能性が考えられる。

これらの成果は、宗教倫理学会第17回学術大会における研究報告「20世紀初頭のイタリアとルーマニアにおける宗教研究と政治状況」、日本宗教学会第76回学術大会における研究報告「エリアーデにおける神秘主義概念の構築 マッキオロとの関連」及び研究論文「マッキオロとエリアーデの往復書簡における「宇宙的キリスト教」の問題」『宗教と倫理』第17号として発表した。

については、研究論文「エリアーデの戦時体験と苦難の正当化 「歴史の恐怖」と死生観の構築」『北海道生命倫理研究』5巻として成果を発表した。

については、2018年度の日本宗教学会及び宗教倫理学会の学術大会において成果として発表できるよう準備を進めている。

さらに、今後の課題として、エリアーデにおける宗教現象学の受容に関しては、エラノス会議における活動、とりわけアンリ・コルバンやゲルシヨム・ショーレム、カール・G・ユングらとの関係性を詳細に分析する必要性が想定される。また、ルーマニア宗教学の全体像を捉えるためには、ヨアン・P・クリアーヌやセルジウ・アル＝ジェオルジェなどの宗教研究者の活動も視野に入れ、さらに総合的に分析する必要がある。これらの課題を解決できるよう、研究

を継続していきたい。

なお、いずれの研究成果も、ルーマニア語およびイタリア語の文献資料の収集・購入にかかわる費用を、旅費、消耗品費として支出した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

1) 奥山史亮「エリアーデの戦時体験と苦難の正当化 「歴史の恐怖」と死生観の構築」『北海道生命倫理研究』5巻、北海道生命倫理研究会、25 - 39頁、2017年3月、査読有り。

2) 奥山史亮「マッキオロとエリアーデの往復書簡における「宇宙的キリスト教」の問題」『宗教と倫理』第17号、査読あり、29~43頁、2017年11月。

〔学会発表〕(計 3件)

1) 奥山史亮「エリアーデにおける宗教史学と宗教現象学の受容と批判」日本宗教学会第75回学術大会、早稲田大学、東京都新宿区、2016年9月11日、招待講演ではない。

2) 奥山史亮「20世紀初頭のイタリアとルーマニアにおける宗教研究と政治状況」宗教倫理学会第17回学術大会、関西大学、大阪府吹田市、2016年10月9日、招待講演ではない。

3) 奥山史亮「エリアーデにおける神秘主義概念の構築 マッキオロとの関連」日本宗教学会第76回学術大会、2017年9月15~17日、招待講演ではない。

〔図書〕(計 1件)

Mircea Eliade, 《La Mythologie primitive》, Critique, No. 27, 1948, p. 708-717の「翻訳」「解題」(どちらも奥山史亮作成)『ニクス』第5号(堀之内出版、2018年、印刷中)。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

奥山 史亮 (OKUYAMA Fumiaki)

北海道科学大学・高等教育支援センター・講師

研究者番号：10632218

